

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【1. 萩城及び関連施設】					
No	名 称	保 護 の 主 体	保 護 の 種 別	指定面積	要 約
1	萩城跡	国	指定	367,788.46 ㎡	萩城は、指月山（標高143m）を中心とした平山城である。慶長9年（1604）、毛利輝元が築城し、その後明治維新によって廃城となるまでの260年間毛利氏歴代13代が居城した。指月山頂の要害、南麓の本丸（天守曲輪）、二の丸（二の曲輪）の大部分と、外堀が国指定史跡に指定されている。
	外堀				萩城外堀は、萩城三の丸（堀内）と城下町を区画する堀である。江戸初期に掘られ、当初20間幅であったが、城下町側からの町家の進出により、14間、8間と狭くなった。現在最終の8間段階での整備が進められている。城下町から堀内（三の丸）に入る3ヶ所の総門（北・中・平安古）の一つ、北の総門が、平成16年(2004)に復元された。高さ7m、幅5mの高麗門で、全国屈指の大きさである。
2	萩市堀内地区	国	選定	重要伝統的建造物群保存地区	堀内地区は旧萩城三の丸であり、築城以来文久3年（1863）に藩庁が山口に移されるまで藩の諸役所や毛利一門、永代家老などの屋敷があった。明治以後は上級武士が萩を離れたため広大な空地となり、旧士族授産のための夏みかん畑に転用された。藩政期の地割と明治期の旧士族授産の名残である夏みかんが堀内地区のたどってきた歴史を感じさせ、全国初となる重要伝統的建造物群保存地区に選定された。
3	平安橋	萩市	指定	有形文化財	萩城三の丸の3ヶ所の総門（北・中・平安古）の一つである平安古の総門前の外堀に架けられた石橋。玄武岩で造られ、吊り桁や定着桁を備えたゲルバー桁橋の構造をもった無橋脚の珍しい橋である。 建築年代：明和年間（1764～71）
4	萩城下街割原標石	萩市	指定	史跡	萩の測量の起点となった基準石との伝承を持つ。江戸時代中期の烏田智庵記に「萩の正中石」とあり、当時萩の中心を示した石と考えられていたことがわかる。
【2. 武家地】					
No	名 称	保 護 の 主 体	保 護 の 種 別	指定面積	要 約
5	旧厚狭毛利家萩屋敷長屋	国	指定	重要文化財	厚狭毛利家は毛利氏の一門（親戚筋）で、石高は9,400石余である。萩城大手門の南100mの要地に位置する。桁行51.5m、梁行5.0mで、萩に残る武家屋敷の中で最大規模を誇る。 建築年代：安政3年（1856）

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【2. 武家地】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
6	旧福原家萩屋敷門	山口県	指定	有形文化財	1棟	福原家は萩藩永代家老で、石高は11,314石余である。宇部に給領地を有していた。萩上屋敷は萩城三の丸（堀内）にあり、この門は屋敷の表門である。上級武家屋敷の門は普通門番所のある長屋門であるが、門番所のないこの形式は珍しいものとなっている。 建築年代：18世紀
7	旧福原家書院	萩市	指定	有形文化財	1棟	萩藩永代家老福原家の萩上屋敷内にあった書院である。現在は萩城本丸（天守曲輪）内に移築され、志都岐山神社の社務所として使用されている。江戸中期における重臣の住居の特徴を良く表している。 建築年代：18世紀後半
8	旧益田家物見矢倉	国	選定	重要伝統的建造物群	1棟	益田家は萩藩永代家老で、石高は12,062石余であり、須佐に給領地を持っていた。上屋敷は堀内の北東端にあり、大馬場に面していた。現在残る物見矢倉は、北の総門から出入りする者を見張るためのものである。 建築年代：19世紀
9	花江茶亭	萩市	指定	有形文化財	1棟	13代藩主毛利敬親が安政3年（1856）頃、三の丸内にあった花江御殿内に造った茶室である。この茶室では敬親が、城中では話しにくい事を茶事に託して各支藩主や家臣とともに時勢を論じ、国事を画策したと伝えられる。明治22年（1889）頃、萩城内に移築されている。 建築年代：安政3年（1856）頃
10	口羽家住宅	国	指定	重要文化財	2棟	口羽家は、萩藩の寄組士で石高は1,018石、代々萩城三の丸に住み、大身の武士の居住区であった堀内地区において現在も旧藩時代そのままの旧位置に残る。全国的に数少ない武家屋敷の一遺例である。 建築年代：18世紀末～19世紀初頭
11	旧周布家長屋門	萩市	指定	有形文化財	1棟	周布家は萩藩永代家老益田家の庶流で、大組士の筆頭として1,530石余の知行地を長門市渋木に領していた。堀内にあった萩上屋敷の表門であり、江戸中期の武家屋敷長屋の様式が良好に保存されている。 建築年代：18世紀
12	旧児玉家長屋門	国	選定	重要伝統的建造物群	1棟	児玉家は寄組に属し、石高は2,243石余である。屋敷は堀内の三年坂筋、平安古の総門に近接した場所に所在した。長屋の南端に門が開いている。入母屋造、本瓦葺きで、腰部分は海鼠壁である。 建築年代：19世紀

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【2. 武家地】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
13	問田益田氏旧宅土塀	萩市	指定	有形文化財	1棟	問田益田家は永代家老益田家の分家筋にあたる。石高は4,096石。堀内にあった上屋敷を囲むこの土塀は、総延長231.7mあり、重臣屋敷の広大さを偲ばせる。往時の姿が良好に保存されている。 建築年代：18世紀
14	旧梨羽家書院	山口県	指定	有形文化財	1棟	梨羽家は石高683石余の大組士である。萩城三の丸（堀内）に屋敷を構える。欄間障子の中綿式などの工作は優秀で、比較的高級な建築物となっている。 建築年代：19世紀初頭
15	煤払いの茶室 （旧梨羽家茶室）		未指定	（有形文化財）	1棟	中津江にあった梨羽家（寄組3,218石余。旧梨羽家書院の梨羽家とは別家）の下屋敷から移築されたものである。江戸時代、萩城年末の大掃除の際に、藩主がこれを避けて家臣の屋敷に退去した。藩主を迎える家では座敷や茶室を新築してもてなした。花月楼形式の茶室である。 建築年代：18世紀
16	旧繁沢家長屋門	国	選定	重要伝統的建造物群	1棟	繁沢家は萩藩寄組に属し、石高は1,094石余である。萩市小川に給領地を持っていた。長屋門は屋敷の表門である。切妻造、平屋建て、桁行29.0mである。 建築年代：19世紀初頭
17	旧二宮家長屋門	国	選定	重要伝統的建造物群	1棟	堀内の蔵田町に面している。二宮家は大組に属し、石高は891石余である。長屋門は屋敷の表門である。入母屋造、本瓦葺で桁行20.0mである。 建築年代：19世紀初頭
18	旧祖式家長屋	国	選定	重要伝統的建造物群	1棟	堀内の蔵田町筋と横町筋の角に所在する。祖式家は大組に属し石高は670石余である。西側は入母屋造、東側は切妻造である。石垣の形状を見ると、もとはさらに東側に延びていたと思われる。 建築年代：19世紀初頭
19	小川家長屋門	萩市	指定	有形文化財	1棟	小川家は石高500石の大組士である。土原に屋敷を構えており、この長屋門は表門である。入母屋造りの棧瓦葺平屋建てで、桁行27.39m。 建築年代：19世紀初頭
20	奥平家長屋門	萩市	指定	有形文化財	1棟	奥平家は石高300石の大組士である。土原に屋敷を構えておりこの長屋門は表門である。寄棟造棧瓦葺平屋建てで、桁行27.85m。 建築年代：19世紀初頭

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【2. 武家地】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
21	坪井九右衛門旧宅	国	選定	重要伝統的建造物群	4棟	坪井九右衛門は石高157石で、平安古に屋敷を構え、敷地裏は橋本川に面していた。長屋門、蔵、主屋は当時の形態を良好に残している。 建築年代：19世紀初頭
22	木戸孝允旧宅	国	指定	史跡	829.76m ²	木戸孝允の実父、藩医和田昌景の家。木戸孝允は天保4年（1833）この家に生まれ、8歳の時に近隣の桂家に養子に入って桂小五郎と名のつたが、養父母死亡のため、嘉永5年（1852）に江戸に入るまでの約20年間をこの家で過ごしている。 建築年代：19世紀初頭
23	旧湯川家屋敷	萩市	指定	史跡	1,282.97m ²	23石の禄を授けられた萩藩士、湯川家の屋敷である。藍場川の流れを屋敷内に引き込んで庭池とし、さらにその水は主屋の台所を通り再び川に戻る。湯殿内には藍場川に面したハトバが設けられ、藍場川周辺民家の典型的な水の利用法をみることができる。 建築年代：19世紀中頃
24	萩市平安古地区	国	選定	重要伝統的建造物群保存地区	4.0ha	重臣の多くは堀内（萩城三の丸）に住居を構えていたが、この平安古地区の開墾が進み、武家住宅が増えた。藩政期の地割や幕末藩政に活躍した坪井九右衛門（157石）の旧宅などの武家屋敷が現在まで良好に遺存している。さらに、堀内・平安古両地区には左右を高い土塀で囲み、見通しのきかない「鍵曲」といわれる鍵手形道路が残る。
25	村田清風別宅跡	萩市	指定	史跡	991.24m ²	村田清風が萩藩政に携わっていた25年間の旧宅跡で、敷地と長屋門が残る。清風は天保の改革において民政や兵制刷新、文武の奨励などに尽力、明治維新に活躍する萩藩の基礎が築かれた。一方厳しい俸約に対する反発もあり、門前の溝蓋石は、清風に不満を持つものが夜間ひそかに欠いたとされている。 建築年代：19世紀初頭
26	萩城城下町	国	指定	史跡	55,087.41m ²	萩城城下町は、旧萩城の外堀から外側にあたり、町筋は基盤目状に画され、中下級の武家屋敷や町家が軒を連ねていた。中心路（通称御成道）から南に向かう菊屋・伊勢屋・江戸屋横丁という小路があり、高杉晋作旧宅や青木周弼旧宅、なまこ壁の土蔵、門、土塀が連なり、城下町の景観を偲ばせる。
	青木周弼旧宅					青木周弼旧宅は、史跡萩城城下町の指定地内、江戸屋横丁に面している。青木周弼は、萩藩13代藩主毛利敬親の侍医となり、医学館長を兼任した。旧宅は主屋と道に面した門、中間部屋からなる。元はこの家と背中合わせの場所に住んでいたが、名声が高まって他国からも教えを請う者が増え、家が手狭になったため、新築したものである。 建築年代：安政6年(1859)春
	野田家旧宅					野田家旧宅は、史跡萩城城下町の指定地内、慶安橋筋に面している。野田家は石高57石で、屋敷は門、主屋、庭園などが良好に保存されている。 建築年代：19世紀初頭

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【2. 武家地】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
27	古萩地区（萩城城下町以外）		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期には既に町並みが完成し、武家地と町人地がそれぞれの街区を形成していた。中でも今古萩・古萩・吉田町は江戸後期まで町人地への変更はなく、上・下五間町、東田町では江戸中期以後、武家地に町人地や寺が入り込んできている。本地区は中下級武家地であるが、一門・寄組の屋敷も5軒あり、大組、遠近付、寺社組、無給通、足軽、中間の階層がほぼ同じ割合で存在した。
28	平安古地区（伝建以外）		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期には平安古本町を含む3本の道路沿いにしか武家屋敷はなく、他は田や深田であった。江戸中期までには石屋町筋や河岸端沿いに武家屋敷が作られ、ほぼ武家地としての完成を見る。比較的高禄の武士が多いのは、堀内に近いという立地条件と、堀内が手狭になり下屋敷地を新たに求めたことによると思われる。
29	江向地区		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期には江向東端に橋本橋が架かり、これを守るように武家屋敷が配置された。武家地は八丁筋を中心に北に広がっていたが、水田もかなり残されていた。江戸中期には藍場川の北側にあった水田も武家屋敷になり、ほぼ武家地としての完成を見る。中級武家地としての雰囲気良好に残す地区である。
30	土原地区		未指定	（重要文化的景観）		土原が中州として形成されたのは寛永年間（1624～43）で、江戸初期にはまだ東浜崎の入江が唐樋町の東に深く食い込んでおり、武家地は松本川沿いにまとまっていた。江戸中期には江後と呼ばれる地域も埋立てられ、武家屋敷が増加した。階層的には大組が半数以上を占め、次いで無給通、足軽が多い。中級武家地である。
31	川島地区（藍場川以外）		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期には御成道付近、十日市筋と善福寺隣のわずかな範囲にしか武家屋敷がなかった。江戸中期までには道路が整備され、武家屋敷も増加する。藍場川上流には下級武士（足軽・中間）の屋敷と百姓地が混在する。土原と橋本町に接した地域は、大組が半数を占め、その他遠近付、無給、中間、足軽が混在し、百姓地が少ない。中下級武家地である。
32	金谷・雑式町地区		未指定	（重要文化的景観）		武家地は橋本橋のたもとを守るように配置されている。江戸中期には雑式町では西側に、金谷では南側に武家地が拡大している。階層で見ると寄組以上は存在せず、大組、無給通、足軽、中間がそれぞれ約3分の1ずつを占める、中下級武家地である。
33	河添地区		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期にはほとんど畑で武家屋敷は橋本河岸の1軒だけであったが、江戸中期には道路が通り、橋本川の近くに隆景寺が建てられた。武家屋敷は平安古に接するところに存在するが、全体として百姓地が多い。徒士、足軽、中間等の下級武士の屋敷が百姓地の中に混在している。

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【3. 町人地】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
34	菊屋家住宅	国	指定	重要文化財	5棟	菊屋家は萩藩の御用商人である。萩城下28町の筆頭である呉服町一丁目に屋敷を構え、幕府の巡見使等の宿所にも利用された。主屋は江戸初期の建物で、全国最古に属する町家である。 建築年代： 主屋 承応元年（1652）～明暦3年（1657）
35	熊谷家住宅	国	指定	重要文化財	4棟	熊谷家は萩藩の御用商人である。問屋・金融・仲買・製塩を業として栄えた豪商であった。江戸中期に建てられた主屋の土間まわりは、丁寧に仕上げた太い梁を縦横に架け渡した豪壮な構成である。4代当主はシーボルトと親交があった。 建築年代：明和5年（1768）
36	旧久保田家住宅	萩市	指定	有形文化財	770.0m ² （敷地）	藩政時代後期、近江国から萩に入って熊谷町の久保田家の分家となった「久保田庄七」が菊屋家の向かいで開いた呉服商の旧宅である。幕末から明治前期の建造物として、意匠、構造、技術にすぐれ、萩城城下町を形成する建造物として極めて重要である。 建築年代：幕末～明治前期
37	須子家住宅	国	選定	重要伝統的建造物群	6棟	須子家は浜崎の商人である。同家は酒造業を営む傍ら、本家・分家ともに北国問屋株を持ち、北前船との交易を行った。建物は浜崎地区の中でも古く、規模の大きな町家である。 建築年代：18世紀後期
38	萩市浜崎地区	国	選定	重要伝統的建造物群保存地区	10.3ha	浜崎は萩城下三角州北東端に位置し、藩政時代は萩城下の港町として、廻船業と水産加工業で栄えた。藩政時代から近代にかけての町家主屋など伝統的建造物が数多く残り、特色ある歴史的景観が現代まで継承されている。
39	今魚店地区	萩市	指定	歴史的景観保存地区	9,782m ²	今魚店町は城下町の中でも他の地区とは異なり壮大な町屋敷が多かった。享保の始め町年寄の上に大町年寄が設けられた時、当町の深野清兵衛と近藤惣左衛門が隔年に大年寄を勤め、後も独占世襲した。また当町には豪商熊谷家も含まれる。
40	古萩地区（萩城城下町以外）		未指定	（重要文化的景観）		江戸初期の「慶安絵図」を見ると、町人地のほとんどが古萩地区に集中する。御成道筋と春若町筋に沿って広範囲に町人地があり、それに平行又は直交する筋にも町人地が広がる。
41	平安古地区		未指定	（重要文化的景観）		外堀を挟んで萩城三の丸の平安古の総門の東南に延びる町人地で、江戸初期の絵図に見る武家屋敷の大部分が江戸中期の絵図では町人地に変わっている。反面埋立てにより武家地は増加し、平安古町の三方を囲む。享保6年（1721）に一丁目・二丁目に分かれた。

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【３．町人地】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
42	御許町・橋本町地区		未指定	(重要文化的景観)		御許町は御成道筋に面し、もと武家地であったが、管理が行き届かず見苦しいため、元禄10年（1697）に町人地となった。当初は橋本町と唐樋町に分けて支配されていたが、まもなく町家が立ち並んできたので宝永7年（1710）4月に「御許町」と名付けられた。これは侍屋敷であったところを町屋敷に変更し、町として「許した」ことから名付けたと伝えられる。
43	椿町地区		未指定	(重要文化的景観)		北は橋本川を隔てて橋本町、南は当島宰判管内の椿西分に接する。東と西は中下級武家地である。萩城下の出入り口に当たり、城下の諸町のうち、三角州外にある唯一の町人地である。町の南にある金谷天満宮の前には城下への出入り口として大木戸が設置されていた。
【４．百姓地】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
44	河添地区		未指定	(重要文化的景観)		萩の城下町が立地した三角州中央部の江向地区と土原地区には田圃が広がり、この田圃を耕作する百姓が三角州内に居住していた。萩城下の百姓地は最も標高の低い南西部の河添と南東部の川島に、下級武家地と混在して所在した。江向に河添沖田、土原に川島沖田の地名が残るのは、河添や川島の百姓の土地利用を想起させるものである。
45	川島地区（藍場川以外）		未指定	(重要文化的景観)		萩の城下町が立地した三角州中央部の江向地区と土原地区には田圃が広がり、この田圃を耕作する百姓が三角州内に居住していた。萩城下の百姓地は最も標高の低い南西部の河添と南東部の川島に、下級武家地と混在して所在した。江向に河添沖田、土原に川島沖田の地名が残るのは、河添や川島の百姓の土地利用を想起させるものである。
【５．寺社建築】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
46	大照院	国	指定	重要文化財	5棟	2代藩主毛利綱広によって明暦2年（1656）建立された臨済宗寺院。萩藩主菩提寺で、初代及び2代から12代の偶数代藩主の墓所がある。江戸時代中期に全焼し、再建された。本堂の主室は方丈形式の典型的な近世禅宗本堂建築であり、建築年代が確実な遺構である。 建築年代（再建）： 寛延3年（1750）～宝暦5年（1755）
47	東光寺	国	指定	重要文化財	4棟	3代藩主毛利吉就が萩出身の名僧慧極を開山として創建した全国有数の黄檗宗寺院。萩藩主菩提寺で、3代から11代の奇数代藩主の墓所がある。大雄宝殿については、特色ある唐様建築であり、中国地方の寺院建築において最高水準を示す。 建築年代：大雄宝殿 元禄11年（1698）

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【5. 寺社建築】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
48	常念寺表門	国	指定	重要文化財	1棟	浄土宗の寺院で天文元年（1532）の創建。表門は京都聚楽第の裏門であったと伝えられ、毛利輝元が伏見の邸に移築していたものを、萩開府の際に当寺を宿所にした縁で移築、寄進した。 移築年代：寛永10年（1633）
49	亨徳寺三門	萩市	指定	有形文化財	1棟	亨徳寺は享徳元年（1452）に江向に創建された真言宗寺院が前身と伝えられる。その後元亀年間（1570～72）に曹洞宗となり、承応元年（1652）現在地に再建された。三門は、浜崎町町人の山県十左衛門幸雄が建立し、寄進したものである。 建築年代：元禄8年（1695）
50	端坊鐘楼	萩市	指定	有形文化財	1棟	松林山端坊は慶長13年（1608）に毛利輝元の意向により建立された浄土真宗本願寺派の寺である。寺内にあるこの鐘楼は、3代藩主毛利吉就が初入国の際、時鐘用として寄進、建立したものである。 建築年代：貞享3年（1686）
51	円政寺内金毘羅社社殿	萩市	指定	有形文化財	1棟	円政寺は真言宗の寺院で、境内に金毘羅社があり、神仏習合の形態が見られる。社殿は寄進された鳥居に延享2年（1745）の銘があること、『八江萩名所図画』に現存するものと同じ社殿が描かれることから、170年は経っていると思われる。本殿、釣殿、拝殿からなり、拝殿は山口県独特の楼造り風である。 建築年代：延享2年（1745）
52	春日神社	国	選定	重要伝統的建造物群	5棟	春日神社は大同元年（806）に奈良春日大社より勧請したという。その後毛利輝元の意向により、慶長12年（1607）に江向伊予八幡宮の地から萩城三の丸の現在地に遷座したと伝えられている。 建築年代（再建）：安永3年（1774）
53	住吉神社	国	選定	重要伝統的建造物群	5棟	住吉神社は明暦元年（1655）に摂津国堺の住吉大社から勧請し、万治元年（1658）に現在地に移転した。歴代藩主の崇敬も厚かった。祭礼は万治2年（1659）に始まり、寛文6年（1666）からは地元浜崎を除く萩市中本町28町のうち数町が交代で祭事を担当し、踊り車を出し家ごとに店頭を作り物で飾った。御船・神輿等の神幸があった。「御船謡」は山口県指定無形民俗文化財である。 建築年代：神殿 万治2年（1659） 拝殿 延宝7年（1679）
54	金谷神社		未指定	（有形文化財）		文治2年（1186）に長門守護佐々木高綱が大宰府天満宮から勧請したのが始まりとされ、長州第三宮とされる。享保5年（1720）に萩城下町の入口である大木戸側の現在地に移転した。祭礼は移転の際、藩主から各町内に御備道具の下げ渡しがあり、それを記念して始められたと伝えられる。神輿・神幣・聖・踊車などの奉納がある。御備と呼ばれる長州一本槍の奉納もあった。 建築年代（再建）：寛政2年（1790）

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【 5 . 寺社建築】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
55	寺町地区		未指定	(重要文化的景観)		萩には寺院が集中し、俗に「萩百ヶ寺」と言われる。これは従来の寺院に加え、毛利氏とともに移転してきた寺が多かったことにもよる。多くの寺は城下で最も標高が高い北古萩周辺に集められ、いわゆる寺町を形成している。海潮寺、亨徳寺、保福寺、梅蔵院等が含まれる。
56	長寿寺十三重塔	山口県	指定	有形文化財	1基	長寿寺は浄土宗の寺院。山口長寿寺 5 世が毛利輝元の帰依を受け、慶長16年（1611）に萩に一字を建立したのに始まる。十三重塔は、江戸時代に大津郡向津具（現長門市）二尊院から移されたこととされ、基礎に嘉元 4 年(1306)の年号がわずかに読み取れる。地方臭がなく、おそらく中央で造られたものと思われる。 建築年代：嘉元 4 年（1306）
【 6 . 街道】						
No	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
57	唐樋札場		未指定	(史跡)		唐樋札場は藩のお触れを示す御高札場があったことからこの名があるが、同時に防長 2 ヶ国の街道の起点であった。萩往還、石州街道、赤間関街道がここから発し、各街道の一里塚には、「唐樋札場従り〇〇里」と記されていた。
58	萩往還	国	指定	史跡	28,061㎡	萩往還は、日本海側の萩と瀬戸内海側の三田尻（防府市）をほぼ直線の最短ルートで結ぶ街道である。総延長は53km。途中山口市を經由する。藩主の参勤交代にも利用され、幕末には志士たちも往来した。最高地点は標高600mを越える、起伏の大きなルートである。
59	落合の石橋	国	登録	登録有形文化財	1基	長さ2.4m、幅1.7mの石橋で、片持梁の役割を果たす柱状の石材の上に、玄武岩らしき 3 列の板石がのる。萩近辺に多く見られるこの構造形式は、この地方特有のものとして登録されている。国の登録有形文化財に登録されている。
60	明木地区半農宿場町集落		未指定	(重要文化的景観)		明木地区は萩往還の完成とともに宿場町として、また市町として栄えた。弘化 2 年（1845）頃の記録では家数73軒、内20軒が商人、53軒が宿人夫馬持ちで、ともに農業に従事していた。
61	佐々並地区半農宿場町集落		未指定	(重要伝統的建造物群保存地区)	2.9454㎦	佐々並地区は明木地区と並び、萩往還の宿場町として栄えた。毛利輝元が広島から萩に移る際にこの地で休憩したといわれ、それにちなんで御茶屋が建てられたと伝えられている。

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【 7・水路】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
62	新堀川		未指定	(重要文化的景観)		萩城外堀から唐樋町まで、古萩地区の南縁辺に開削。「萩新堀川開鑿幕府へ伺図」によると延長8町、幅5間、深さ5尺。現在の延長は1,132m（後の造成部分を除く）。貞享4年(1687)に城下町の水はけを目的として、幕府に願い出て許可された。具体的な完成年月は不明であるが、元禄12年（1699）の絵図によって計画通り実現されたことが確認できる。延享元年（1744）に藍場川が接続した。
63	藍場川	萩市	指定	歴史的景観保存地区	1,675ha	三角州内の水路であり、大溝とも呼ばれた。『防長風土注進案』によると延長1,342間半。現在の延長は2,572m。もとは田畑へ水を引き入れるための用水路であったが、6代藩主毛利宗広が消防水利及び舟運のために開削を命じた。享保2年（1717）に江向付近まで完成し、延享元年(1744)に新堀川までの全線が完成した。開削から20～30年後に江向に藍玉座が設けられたため、いつの頃からか藍場川と呼ばれるようになった。 全線開通：延享元年（1744）
64	姥倉運河		未指定	(重要文化的景観)		洪水時の水を排出するために松本川河口から小畑湾にかけて掘られた運河である。「姥倉開作一件」によると延長419間半、幅15間。現在の延長は835m。嘉永5年（1852）11月に着手、2年半後の安政2年（1855）6月に完成した。総工費は銀1,250貫。萩町人からの献納も多数に上った。この運河の完成により、萩は長く大規模な水害を免れることになった。 全線開通：安政2年（1855）
【 8・藩校明倫館】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
65	旧萩藩校明倫館	国	指定	史跡	10,795.01m ²	5代藩主毛利吉元により家臣の文武修行のために萩城三の丸（堀内）に創建され、その後江向の地に拡張、移転した。有備館（剣槍稽古場）や再移築された南門、観徳門、聖賢堂等が現存する。また水中騎馬の練習場であった「水練池」は、全国で現存する唯一のものである。現在敷地は萩市立明倫小学校となっている。 建築年代：嘉永2年(1849)
66	明倫館遺構 南門	萩市	指定	有形文化財	1棟	嘉永2年（1849）に江向に新築された新明倫館の正門で、藩主が聖廟を拝する春秋の「釈菜（孔子祭）」や公式行事以外は開かれなかった。明治以後寺院の表門として移築されていたが、平成16年（2004）に元の場所に移築、復元された。 建築年代：嘉永2年(1849)
67	明倫館遺構 観徳門	萩市	指定	有形文化財	1棟	旧藩校明倫館の遺構であり、孔子を祭る聖廟の前門である。全体に木鼻や操形の多い装飾的要素が目立ち、構造的にも大仏様や禅宗様の要素を持つ珍しいものである。 建築年代：嘉永2年(1849)

(2) 資産に含まれる文化財

①整理表

【 8 . 藩校明倫館】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
68	明倫館遺構 万歳橋	萩市	指定	有形文化財	1基	明倫館聖廟への石橋で、中国上代の形式を模倣し、諸侯の学校であることの象徴とした。中国風のデザインが施された太鼓橋である。現在は萩城跡の志都岐山神社（明治12年創建）の庭園に移築されている。 建築年代：嘉永2年(1849)
69	明倫館遺構 聖賢堂	萩市	指定	有形文化財	1棟	藩校明倫館の聖廟前、観徳門の左右にあった東塾、西塾の遺構である。当時は聖廟で行われる「積菜（孔子の祭）」の道具などを納めたり、祭りの準備に使われていた。廃校後両塾を合わせて1棟とし、市内の阿呼社（佐世天神）に移築されていたが、大正7年（1918）に水練池の南に再移築された。桁行7.6m、梁間2.8mの小さな建物である。 建築年代：嘉永2年(1849)
【 9 . 伝統工芸】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
70	萩焼古窯跡群	山口県	指定	史跡	1,330㎡	萩焼は、「一楽二萩三唐津」といわれるように、茶陶として著名である。江戸時代初期、萩藩主毛利家は、文禄・慶長の役(1592～98)で連れ帰った朝鮮人陶工に命じて松本村中の倉（現萩市椿東）に御用窯を開いた。萩焼古窯跡群は、萩市椿東での発掘調査により発見された。5基の窯跡及び出土品などにより、その発展過程を知ることができる全国でも数少ない古窯群である。
【10.藩主墓所】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
71	萩藩主毛利家墓所	国	指定	史跡	3.4ha	
	天樹院墓所					萩藩祖毛利輝元の墓所。この地にもと四本松別邸と呼ばれた輝元の隠居所があり、輝元の死後天樹院という菩提寺となった。現在寺院はなく、墓所のみが残っている。
	大照院墓所					大照院は2代藩主毛利綱広によって建立された臨済宗寺院。寺名は初代藩主秀就の法名による。初代と2代以降の偶数代の藩主の墓所がある。各藩主墓所前には、家臣から寄進された石灯籠が立ち並ぶ。墓石の形式は五輪塔。
	東光寺墓所					東光寺は3代藩主毛利吉就によって建立された黄檗宗寺院。3代以降の奇数代藩主の墓所がある。大照院同様、各藩主墓所前に石灯籠が立ち並ぶ。墓石の形式は位牌型。

(2) 資産に含まれる文化財

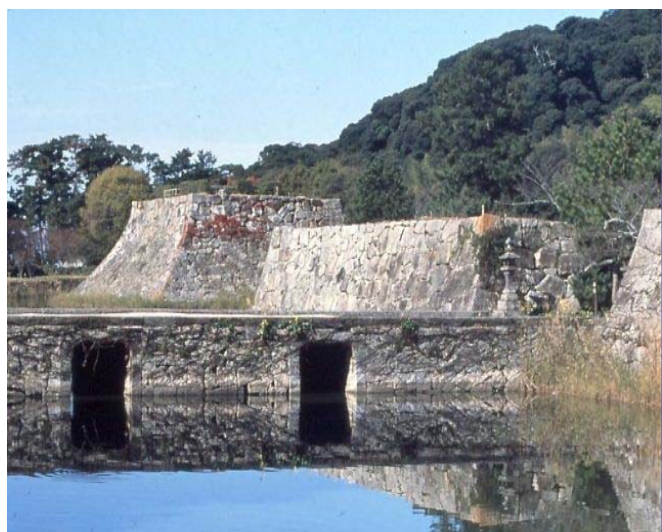
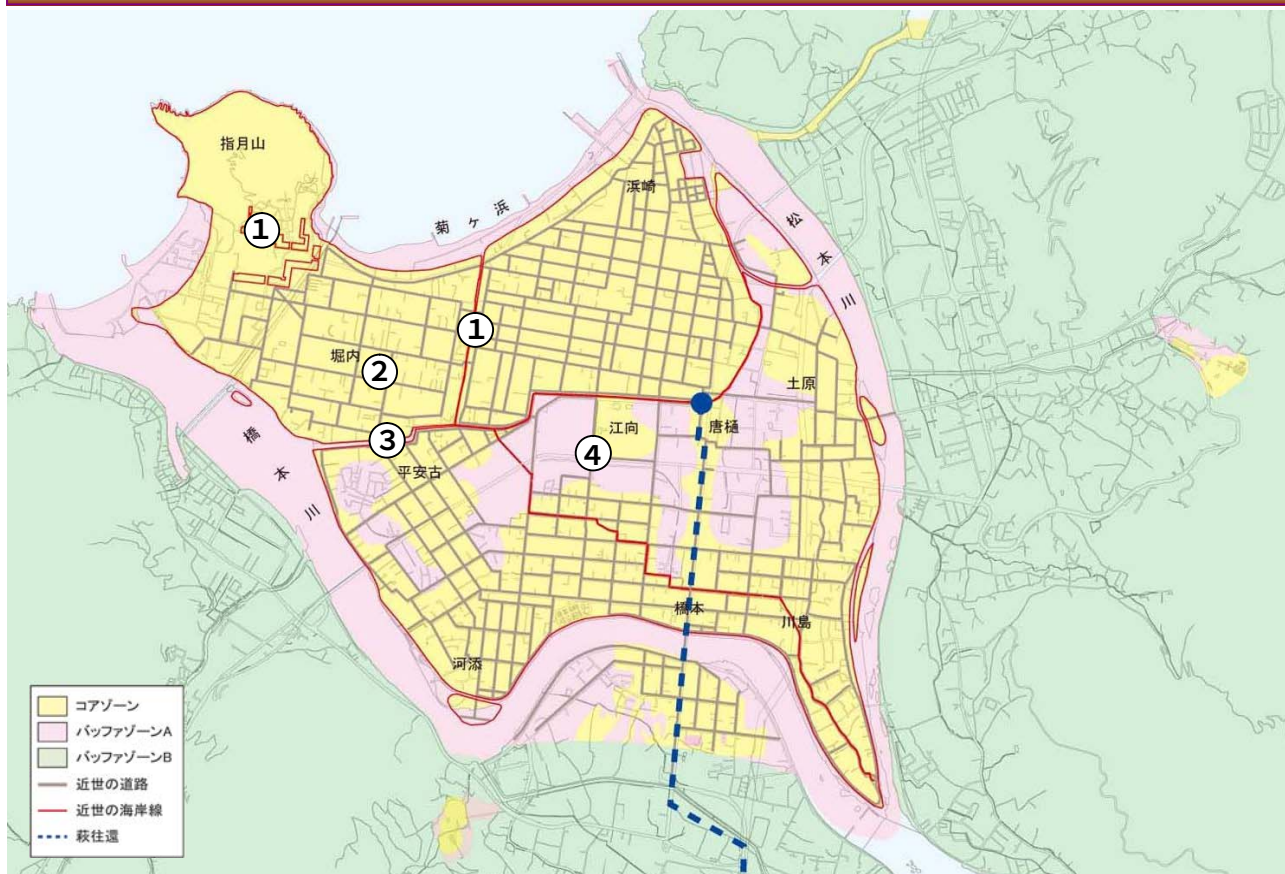
①整理表

【11.藩役所】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
72	旧萩藩御船倉	国	指定	史跡	423.45m ²	御船倉は、藩主の御座船を格納した場所である。全国唯一の屋根を備えた藩政時代の御船倉である。同時に御船倉は浜崎宰判の役所でもあった。浜崎代官は、浜崎の町方・浦方、加えて六浦、萩沖の六島と見島を管轄した。 建築年代：17世紀
73	藍玉座跡	萩市	指定	歴史的景観保存地区	631.8m ²	藍玉座は藍色染料の元となる藍玉の製造場として、明和年間（1764～71）に藩により開設された。天保14年（1843）に一時廃止されたが、嘉永3年（1850）藍玉の生産・販売統制を復活し、安政3年（1856）の産物取立政策の中でもこの方針を推し進めた。藍場川の名は藍玉座に由来する。北側60m、西側40mに及ぶ長い土堀が残る。
74	当島宰判勘場跡		未指定	（史跡）		当島宰判勘場とは、当島代官所である。藩政時代、川島庄及び椿東分、椿西分、三見村、山田村等は当島代官が管轄していた。最初は御船倉に浜崎代官所と併置されていたが、寛政4年（1792）江向八丁の地に移された。
75	野山獄・岩倉獄跡	萩市	指定	史跡	128.91m ²	野山獄（上牢）と岩倉獄（下牢）は、藩士野山・岩倉両家が正保2年（1645）刃傷沙汰を起こしたため両者取り潰し、以降藩の牢獄となった。吉田松陰が密航に失敗し、野山獄に投ぜられ、1年の獄中生活の間、同囚に講義するという前例のない教育活動を行った。同行した金子重輔は岩倉獄で病死。また幕末の藩の内部抗争により、保守派、改革派とも多数ここで処刑されている。
76	菊ヶ浜土塁（女台場）	萩市	指定	史跡	6,035m ²	下関戦争の影響を受け、浜崎町の住民が城下を自ら死守する機運が高まったことから藩による土塁築造の命により完成したものである。武士の妻や奥女中までが派手な装いで応援したことに「女台場」の名が由来する。
【12.天然記念物】						
№	名 称	保 護 の 主 体		保 護 の 種 別	指定面積	要 約
77	指月山	国	指定	天然記念物	19.1ha	日本海中の独立山で標高143m、本土との間にできた砂嘴による陸繋島である。毛利輝元はこの山麓を埋め立てて築城し、以来300年にわたる藩政時代にその森林は城内林として保護された。

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【1. 萩城及び関連施設】



1. 萩城跡



1. 萩城跡 (外堀)



2. 萩市堀内地区



3. 平安橋

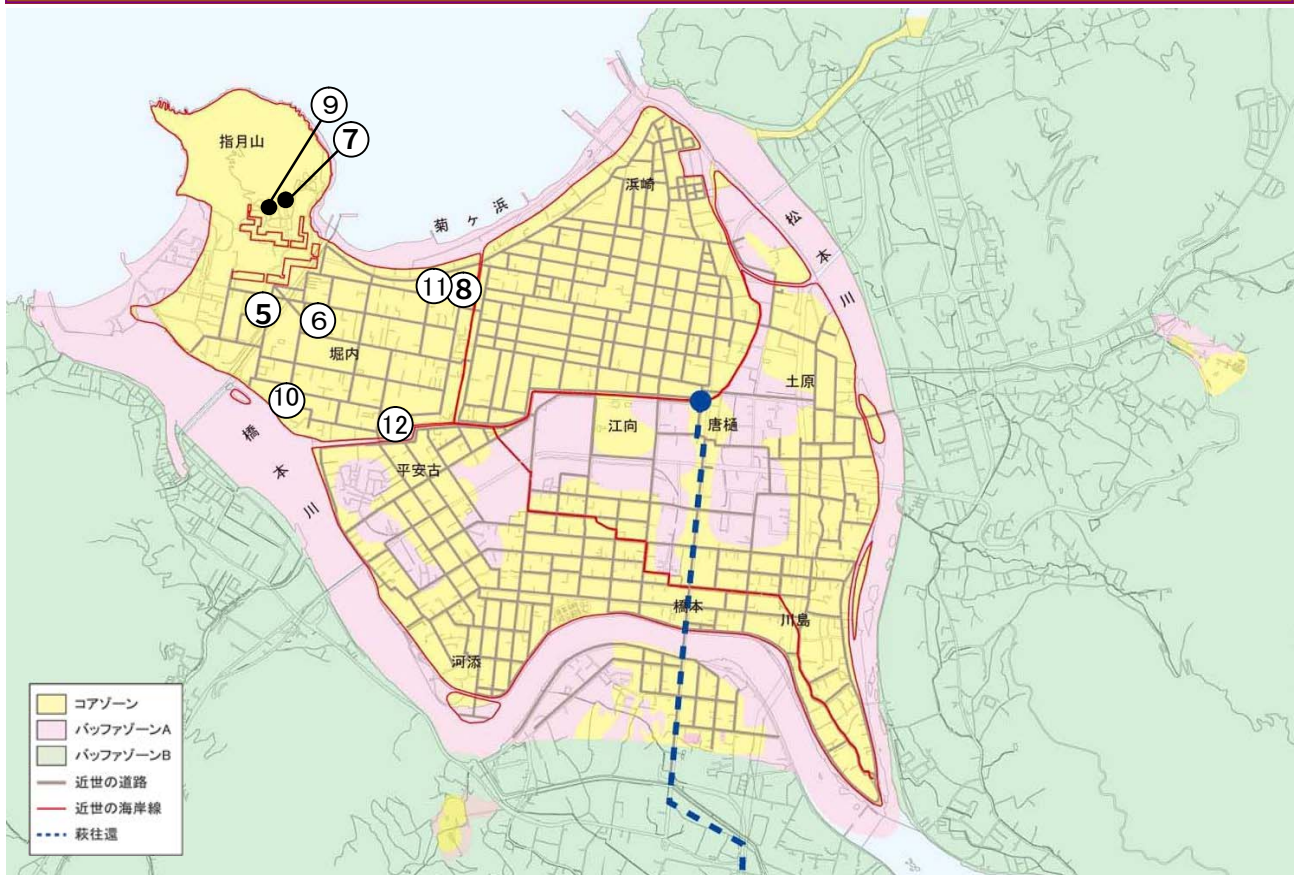


4. 萩城下街割原標石

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【2. 武家地】 -1



5. 旧厚狭毛利家萩屋敷長屋



7. 旧福原家書院



10. 口羽家住宅



8. 旧益田家物見矢倉



11. 旧周布家長屋門



6. 旧福原家萩屋敷門



9. 花江茶亭

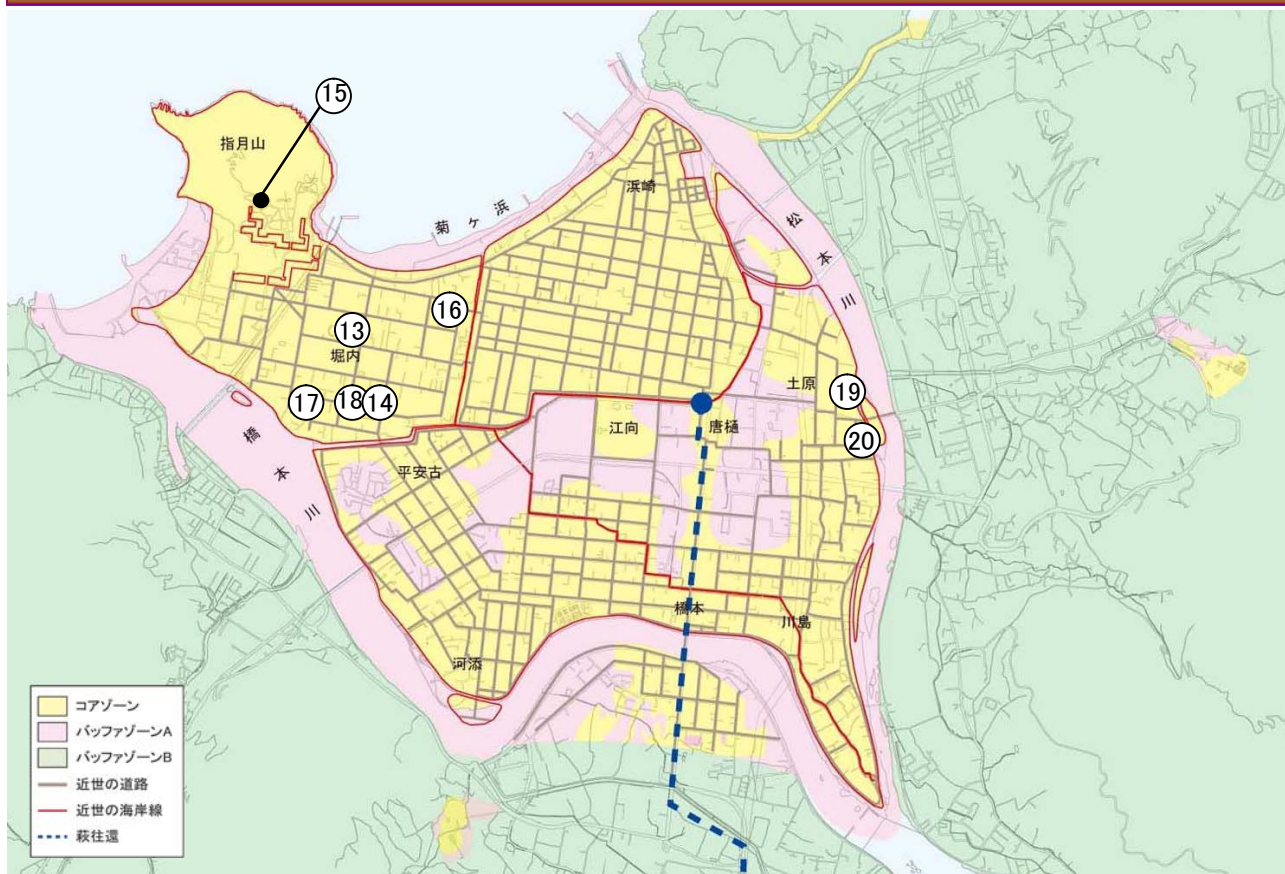


12. 旧児玉家長屋門

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【2. 武家地】 -2



13. 問田益田氏旧宅土塼



15. 煤払いの茶室(旧梨羽家茶室)



18. 旧祖式家長屋



16. 旧繁沢家長屋門



19. 小川家長屋門



14. 旧梨羽家書院



17. 旧二宮家長屋門

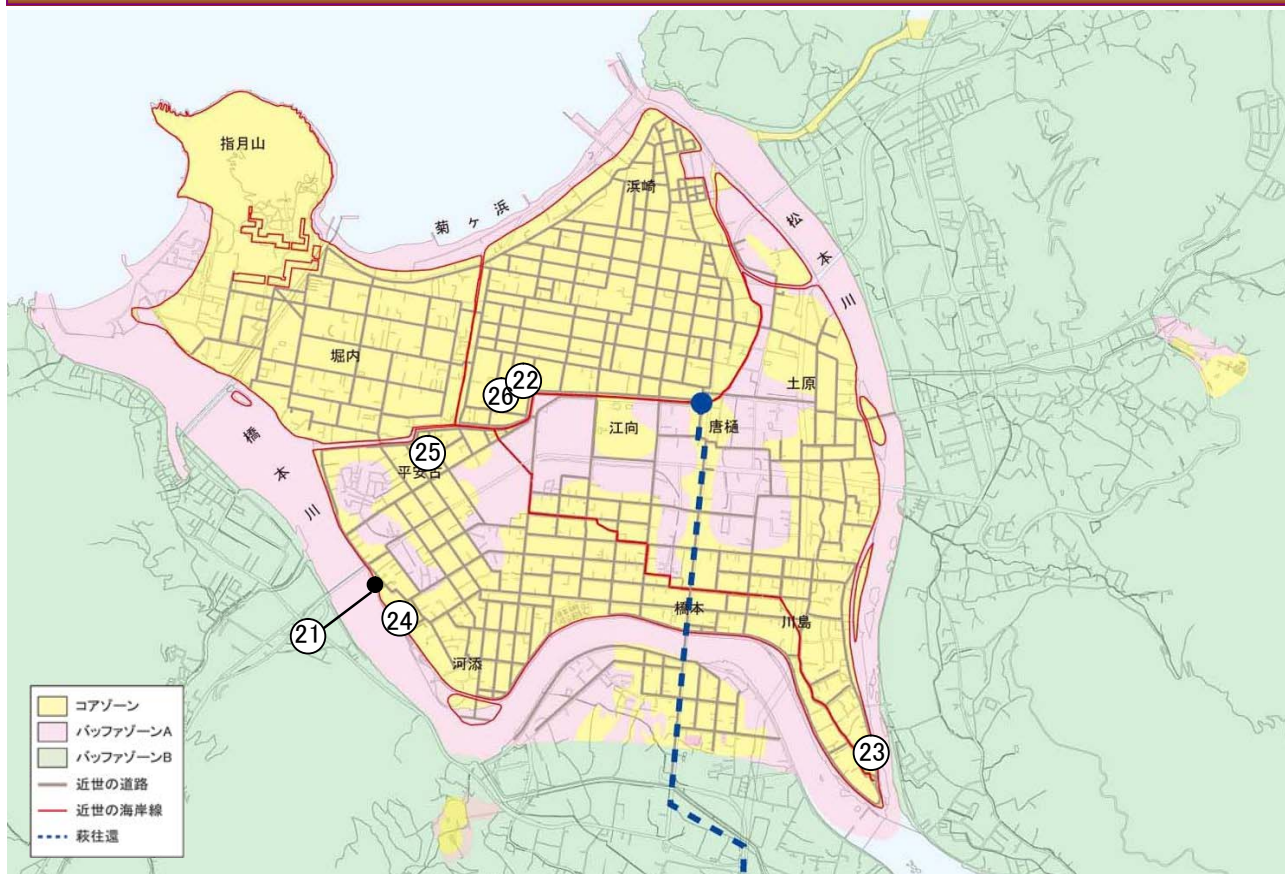


20. 奥平家長屋門

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【2. 武家地】 - 3



26. 萩城城下町



21. 坪井九右衛門旧宅



25. 村田清風別宅跡



23. 旧湯川家屋敷



26. 萩城城下町 (青木周彌旧宅)



22. 木戸孝允旧宅



24. 萩市平安古地区



26. 萩城城下町 (野田家旧宅)

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【2. 武家地】 -4



27. 古萩地区（萩城城下町以外）



29. 江向地区



30. 土原地区



32. 金谷・雜式町地区



28. 平安古地区（伝建以外）



31. 川島地区（藍場川以外）



33. 河添地区

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【3. 町人地】



34. 菊屋家住宅



36. 旧久保田家住宅



40. 古萩地区(萩城下町以外)



37. 須子家住宅



41. 平安古地区



35. 熊谷家住宅



38. 萩市浜崎地区



42. 御許町・橋本町地区



39. 今魚店地区

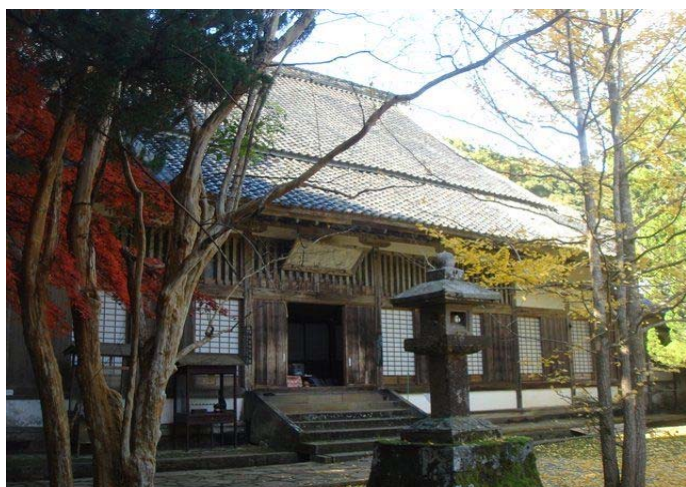
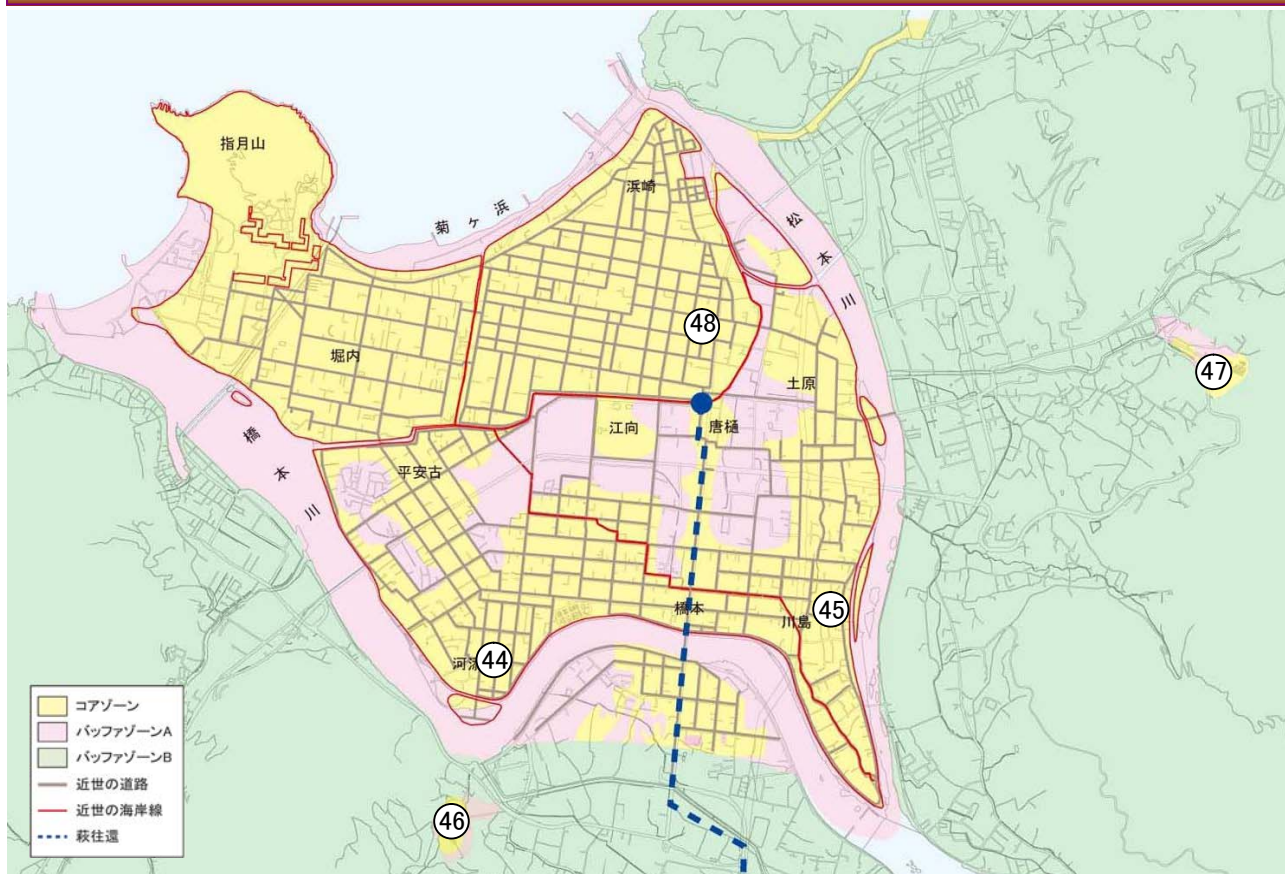


43. 椿町地区

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【4. 百姓地】、【5. 寺社建築】－1



46. 大照院



48. 常念寺表門



47. 東光寺



44. 河添地区



45. 川島地区（藍場川以外）

②構成要素ごとの位置図と写真



A photograph of a traditional Japanese building, likely a temple or shrine, featuring a multi-tiered tiled roof and white walls. The building is surrounded by trees and a fence, with a clear blue sky in the background.

- 25 -

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【6. 街道】-1、【7. 水路】



57. 唐樋札場



62. 新堀川



58. 萩往還（萩地域）



63. 藍場川



64. 姥倉運河

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【6. 街道】-2



60. 明木地区半農宿場町集落



59. 落合の石橋



61. 佐々並地区半農宿場町集落



58. 萩往還 (山口地域)

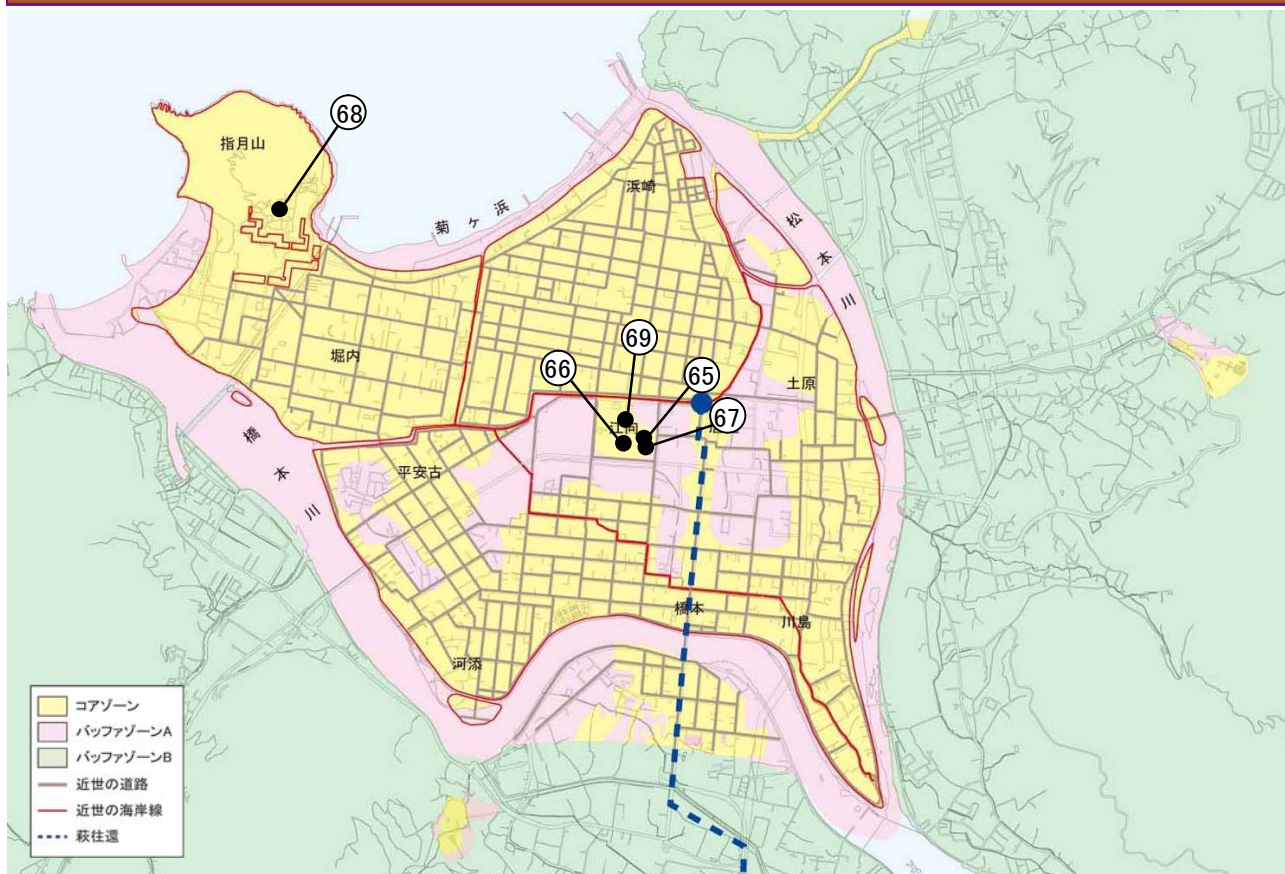


58. 萩往還 (防府地域)

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【8. 藩校明倫館】



65. 旧萩藩校明倫館



66. 明倫館遺構 南門



67. 明倫館遺構 観徳門



68. 明倫館遺構 万歳橋

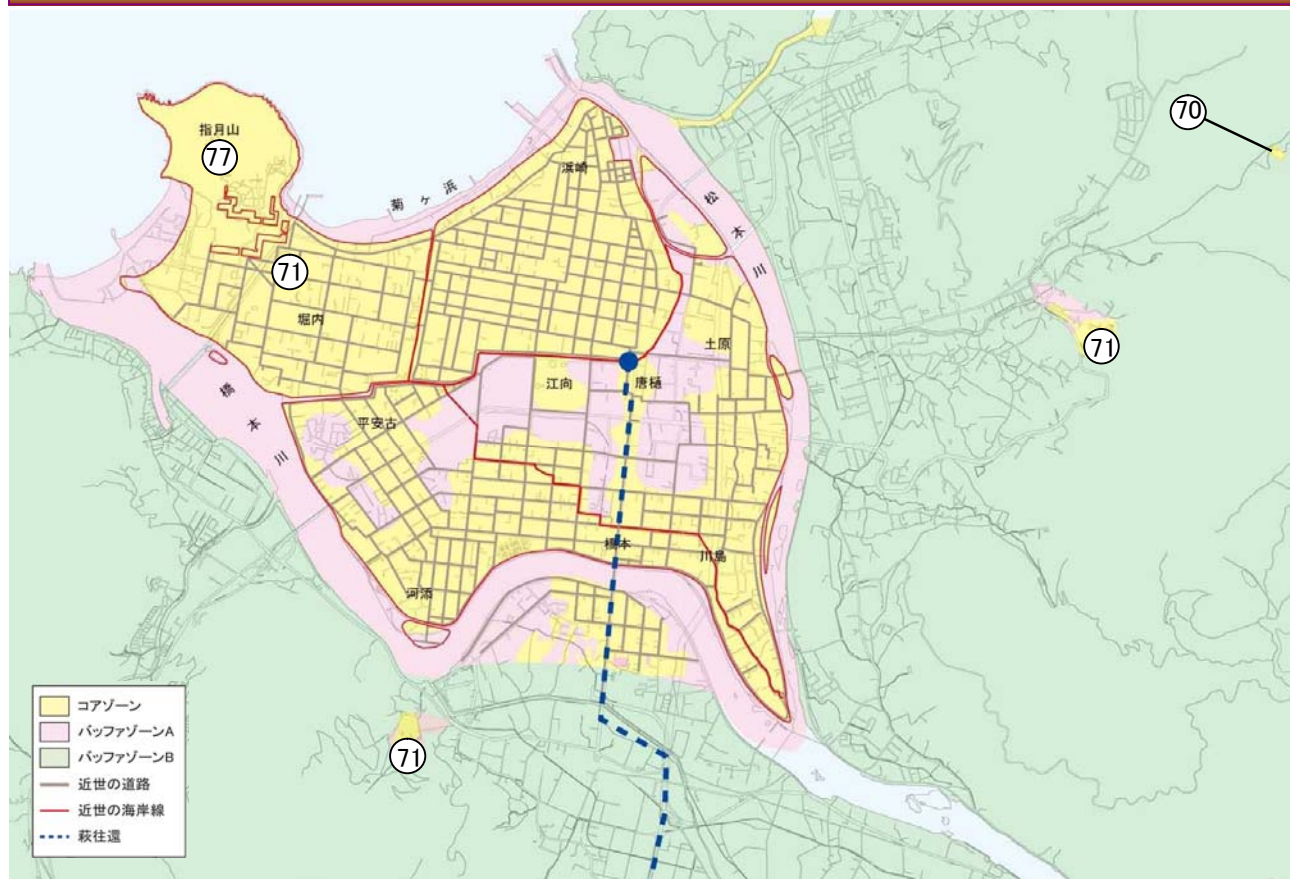


69. 明倫館遺構 聖賢堂

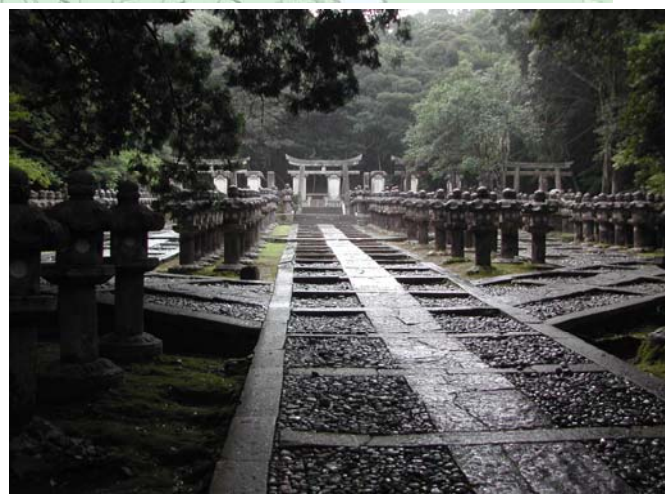
(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【9. 伝統工芸】、【10. 藩主墓所】、【12. 天然記念物】



71. 萩藩主毛利家墓所（天樹院墓所）



71. 萩藩主毛利家墓所（東光寺墓所）



71. 萩藩主毛利家墓所（大照院墓所）



70. 萩焼古窯跡群

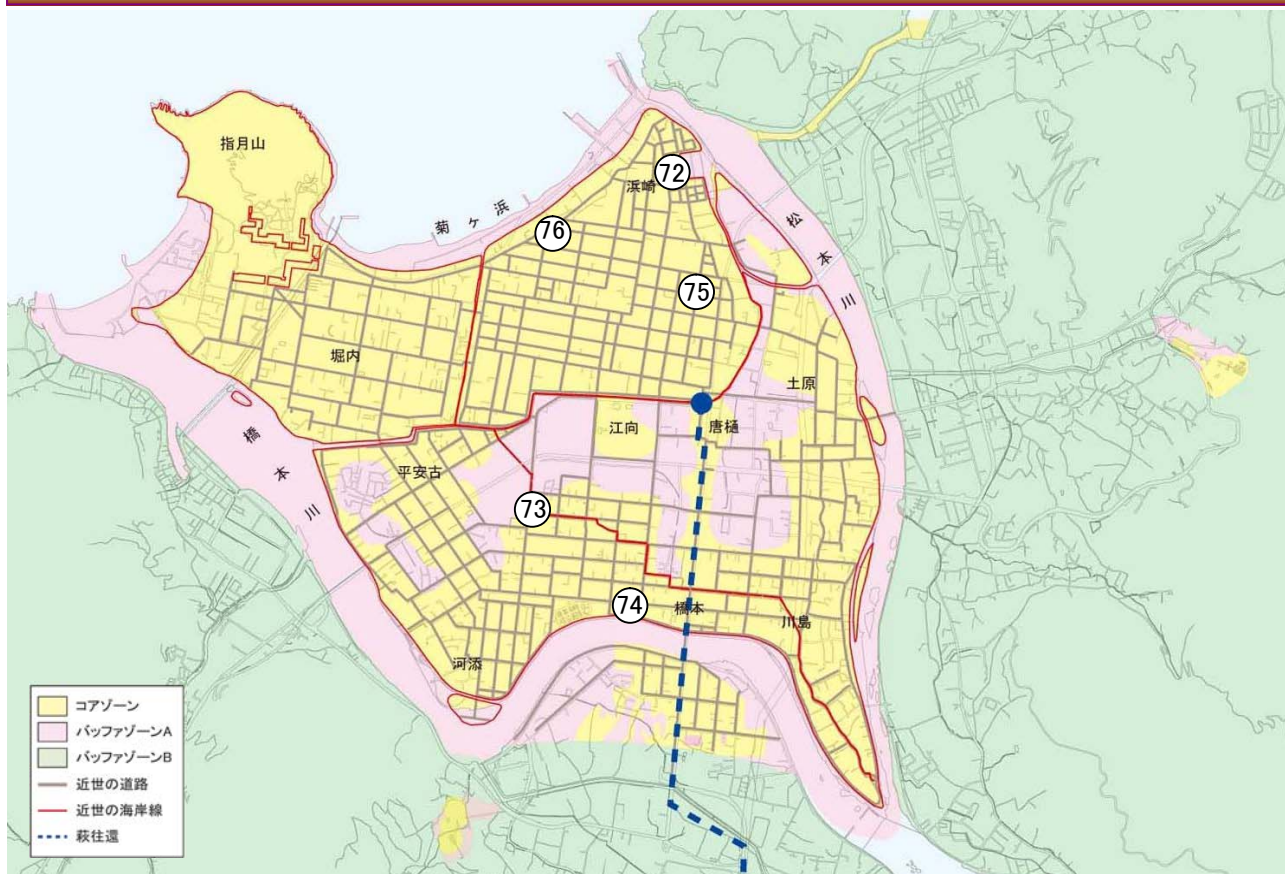


77. 指月山

(2) 資産に含まれる文化財

②構成要素ごとの位置図と写真

【11.藩役所】



72. 旧萩藩御船倉



75. 野山獄・岩倉獄跡



73. 藍玉座跡



74. 当島宰判勘場跡



76. 菊ヶ浜土塁（女台場）